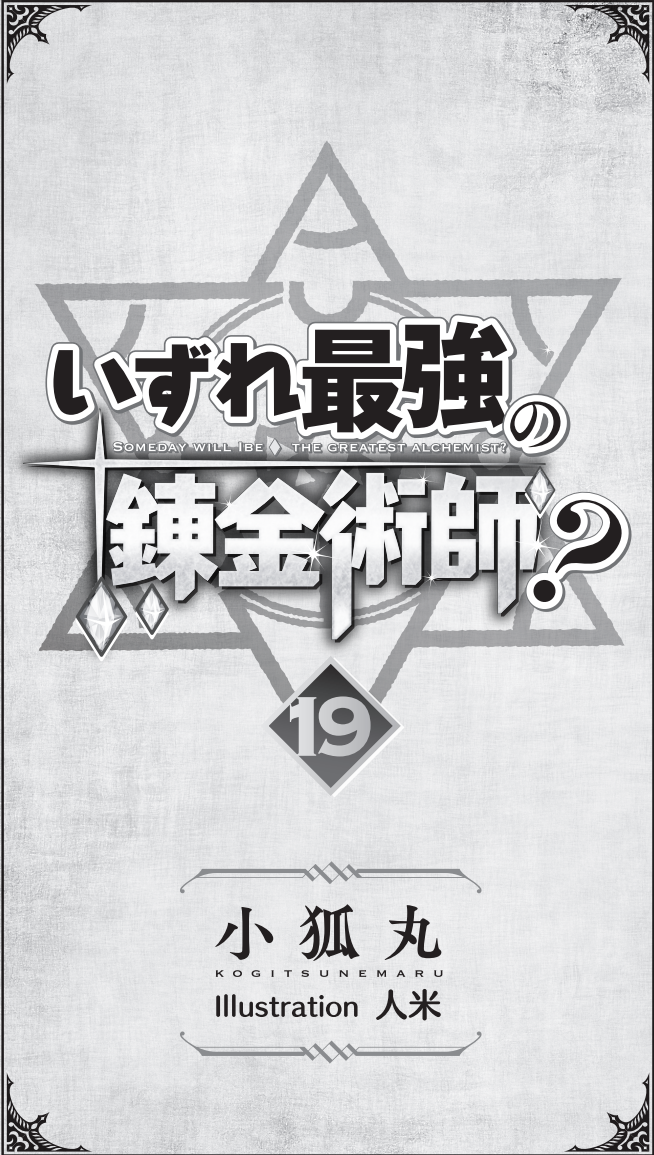




いづれ最強の 錬金術師?

SOMEDAY WILL I BE THE GREATEST ALCHEMIST?

19

小狐丸

KOGITSUNEMARU

Illustration 人米

パール

邪精霊の欠片から生まれた存在。
人体錬成され、人族として復活した。

ツバキ

ツバキ
椿の花のように
赤い瞳を持つ
グレート
ドラゴンホース。

タイタン

タクミによって
魔改造されたゴーレム。
規格外の戦闘力を持つ。

カエデ

アラクネという
厄災クラスの魔物。
タクミに懐いている。

エリザベス

シドニア神皇国の
元皇女。
邪精霊に憑かれ
倒れたが、
アキラ達と共に
再び生をうけた。

ヤマト

地球から召喚
された元勇者。
アキラと同じく
人体錬成された。

アキラ

地球から召喚
された元勇者。
ある鬼才
錬金術師によって
魂から人体錬成
され、蘇った。

タクミの家族

TAKUMI'S FAMILY



マリア



ソフィア



マーニ



パールクト



フルーナ



エトワール



春香



フローラ

タクミ

ちょっぴり臆病な本作の主人公。
剣と魔法の異世界に転生したが、
喧嘩もしたことがないので
生産職を究めようと決意する。

登場人物紹介

CHARACTERS

1 大きな問題はなし。けれど……

気持ちの良い風が吹き抜け花びらが舞う。

精霊の泉はきらきらと太陽の光を反射し、その後ろにある精霊樹を水面に映す。

陽の光を浴び、精霊樹は青々とした葉を輝かせる。

様々な草花が咲き乱れ妖精が楽し気に飛んでいる。

それ以上に数えきれないほど多くの精霊達が、この場所が特別なのだと示している。

気持ちの良い風がまた優しく吹き抜ける。

ああ、聖域は今日も平和だ。

騎士団に配備する乗り物の製作を一通り終えた僕——タクミ。

さらに強化された騎士団に守られている聖域の住民の数は、相変わらず少しずつ増加している。もちろん、減る事もある。

聖域の外で暮らす事を望む者も、稀にいるからだ。

商人になりたい人なんかは、聖域の外で勝負したいと思うのは自然だからね。それに当たり前だけど、お年寄りの中には、安らかにその寿命を迎える人もいる。新たに生まれる命もあれば、創世の女神ノルン様のもとに還る命もあるのは、聖域も外の世界も変わらない。

それ以外では住民の数が減る機会はある。もともと外の世界から聖域に逃れてきた人が多いのも理由の一つだろう。

いまだに聖域へと救いを求めて逃げてくる人はいるけれど、そんな人達も全員が結界を抜けられるわけじゃない。精霊の審査はしっかりしているからね。

けどそんな人達は、城塞都市のウェッジフォートやバロールが受け皿になっている。

そもそもバーキラ王国やロマリア王国が安定しているし、旧シドニア神皇国の跡地の復興が上手くいっている、そちらにも移住者は流れている。

わざわざ遠く大陸の西端にある聖域まで来る人は少ないんだ。

僕の子供達、エトワール、春香、フローラの映画も相変わらず絶好調。バーキラ王国の王都バキラトスでロングラン上映中らしい。

実はすでに、バーキラ王国産の映画も完成し、上映が始まっているそうだけど、いまだにエトワールや春香、フローラが出演する映画は別格扱いだそう。彼女達の映画のチケットはプラチナチケットなんだとか。

そのエトワール達は、今日も勉強に訓練に遊びに弟達の世話にと、元気いっぱいだ。

妻達もそれぞれが自分のしたい事を見つけてイキイキと暮らしている。

ソフィアは子育てを頑張りながら、聖域騎士団の鬼教官として日々の訓練に励んでいるし、マリアには家の事を全部任せているが、本人はそれが嬉しいみたいだ。

うちにはしっかりしたメイド長のメリーベルやマーベル、サーラ、アンナ、ティファなどのメイド達がいる。

彼女達もボルトンの街にある屋敷や王都の拠点を転移陣で行き来しながら頑張ってくれているから、マリアの負担はそれほど大きくないと思う。

マーニは、僕達と出会う前は貧農だった事もあって、武術系や生産系のスキルの伸びしろが大きい。

だからなのか、妻達の中で自身を鍛える事に一番積極的なのはマーニかもしれない。

一度、全てを失った経験からか、今あるものを護りたい気持ちが一層強いのだろうな。

まあ、下の子達がまだまだ手がかかるから、三人ともメイド達の力を借りながらの母親業をしながらだけどね。

それと魔大陸にある聖域騎士団の拠点を拡張してほしいと要望が上がっている。

これは聖域騎士団からじゃなく、魔大陸の北、六ヶ国ある都市国家のうち、唯一外に開かれた港

を持つアキュロスの王、フラール女王からだ。

僕達の暮らす大陸の南側にある魔大陸。

その名の通り大陸全土が魔境のような過酷な地。

数えるのも嫌になるくらいのダンジョンが点在し、ダンジョンから魔物が溢れ出すスタンピードも日常茶飯事。

そこには強固な城壁で囲われた都市国家が六つ存在している。

まず、魔大陸でも北端にあり、唯一港を持ち僕達の住む大陸と繋がる国アキュロス。その女王がフラール女王。

巨漢の熊人族の獣王グズルが治めるバーガード。

レープスタンを治める白虎の獣王ディーガ。

アトロポリスを治める獅子人族の獣王ライバー。

シュミハザールを治める鬼人族の鬼王ジャイル。

ロドスを治める悪魔族。悪魔王ガンドルフ。

このとびつきり個性的な王達が、過酷な魔大陸でたくましく着実に国を運営しているんだ。

そんな魔大陸のフラール女王が、僕達の拠点を拡張してほしい理由。

それは、この数年、僕達が暮らす北大陸との交易の活発化で食料事情が改善し、魔大陸にあると

この国も人口が増加傾向にある事らしい。

ただ、場所は魔大陸。

堅固な城壁に守られた場所でしか暮らせない。

古い城壁の外側に、一回り大きく新しい城壁を築く。

そうして都市国家は大きくなってきたのだけど、現在の規模の城壁の外側に新たな城壁を築くのは大変な事業になるからね。

ただ、このフラール女王からの要望は、僕達からすれば受け入れ難い。

「アキュロスと近いとは言っても、僕達の拠点は、開放しない方がいいよね」

「はい。転移陣を設置しているのは知られたくありませんね」

僕は聖域の屋敷にてソフィアに相談した。

魔大陸の拠点を開放したくない理由。それはソフィアも言うように、転移の魔法陣を設置してあるからだ。

僕達は、魔大陸だけでなく天空島やバーキラ王国の王都の拠点、ボルトンの街の屋敷にも転移の魔法陣を設置しており、聖域との行き来に使用しているが、それは聖域としては極秘事項だ。

フラール女王の要望も理解できるけれど、僕達の拠点到立ち寄るのと、拠点を拡張して住民を受け入れるのとはわけが違う。

「騎士団長のガラハットさんとも相談した方がいいね」

「そうですね。魔大陸の拠点は、主に聖域騎士団が使っていますから」

聖域からボルトンや王都への転移の魔法陣は、主にうちのメイドや執事しゅじが使用する事が多い。あとはアカネとルルちゃんか。

アカネは服飾関係の仕事をしているので、王都の僕達の店に定期的に顔を出しているからね。

逆に天空島への転移の魔法陣は、ベールクト達、有翼人ゆうよくじん族が主に使用しているし、魔大陸は訓練でダンジョンを使用する聖域騎士団が使っている。

まあ、聖域騎士団は魔大陸との行き来に、大型飛空艇ひくうていのガルダーも使っているけどね。

「ではガラハットさんに声をかけておきます」

「うん。お願い」

魔大陸の拠点について話すなら、ガラハットさんは外せない。

とはいえ話し合う前から答えは決まっているんだけどね。

早速集まってフラール女王からの要望について話し合う。

メンバーは、僕とソフィア、ガラハットさんとヒースさん。

ヒースさんは、冒険者パーティー「獅子ししの牙きば」の元リーダー。今では聖域騎士団で指揮官を務め

ている。

ライルさん？ ライルさんは、部隊を指揮するなんて無理だよ。能力は高いんだけどね。

「拠点到外部から居住者を受け入れるのは、考えるまでもなく問題外ですな」

「ああ、ダンジョンの行き帰りに、立ち寄って一泊する野営地を貸すのとはわけが違う」

「ですよねえ」

話し合い開始早々、そこに話し合いの余地はないと、ガラハットさんとヒースさんが、フラール女王の要望を告げた僕の前で首を横に振る。

「魔大陸の拠点は、いわば軍事施設です。転移の魔法陣だけでなく、隠さねばならぬ機密だらけですぞ」

「そうだな。滑走路かっそうろを離着陸するガルダーやサンダーボルトも、所有しているのはうちだけだからな」

「そうなんですよねえ」

陸戦艇りくせんていのサラムンダーは、ユグル王国やバーキラ王国、ロマリア王国に少数融通ゆうずうしたけれど、空を飛ぶガルダーやサンダーボルトなんかは外に出していないし、今後も出すつもりはない。

ガラハットさんとヒースさんの意見は最初から分かっていた事だ。一応、念のため、こんな話が来てますよって確認しただけとも言っ

ソフィアが言う。

「タクミ様。フラール女王には、聖域騎士団の拠点ではなくアキュロスを拡張するか、別の場所に城塞都市を建設してはと提案するしかないのでは？」

「そうなるよねえ」

フラール女王が、何を思っただけで僕達の拠点を言ってきたのか分からないけれど、多分、まったく一から街を建設するよりも簡単だからという程度の考えだと思っただけ。魔大陸の王様って、大雑把で適当なんだよな。

それに今のアキュロスの街を、さらに外側に拡張するのは大変だ。何しろ、昔から何度も拡張してきたアキュロスは、城塞都市としてはかなり大きく、そのさらに外側に城壁を囲うとなると、かなりの大工事になる。

「そもそもアキュロスから僕達の拠点を、そこまで近くないしね」

「はい。確かに他の国と比べれば、アキュロスが一番近いのは間違いないかもしれませんが、戦えない者の移動は難しいと思いますよ」

魔大陸に暮らす人達なら平気なのかもしれないけど、それでも子供やお年寄りには厳しいと思う。それくらい魔大陸は過酷だ。

「まあ、タクミなら城塞都市を造るのも簡単だろう」

「いや、ヒースさん。できるのは間違いないですけど、問題はそこじゃないんですよ」

ヒースさんは、ウェッジフォートを造ったばかりの時、モンスタースタンピードと一緒に解決したから、僕がああ規模の城塞都市を短期間で造れるのは知っている。

でも今回の問題はそこじゃない。

ガラハットさんが頷いて言う。

「問題は、フラール女王に要求する報酬じゃないか？」

「ええ」

「ああ、そりゃタダじゃまずいか」

ボルトン辺境伯から未開地の開発を依頼されて、ウェッジフォートを造ったけれど、あれも一応報酬はもらっている。

あの規模の城塞都市を造ったにしては格安だけどね。

まあ、ウェッジフォートは、僕が調子に乗ってやり過ぎたから仕方ない。もともとボルトン辺境伯は、あそこまでの城塞都市は求めてなかったからね。

で、魔大陸という場所に城塞都市を造るのなら、本当ならウェッジフォート以上に報酬を弾んでもらわないといけない。

だけど、そうなるとフラール女王というより、魔大陸の国じゃ支払いは難しいんだよな。

アキュロスは、比較的古くからサマンドール王国と交易していたので、大陸共通通貨を保有しているけれど、他の国は最近まで基本的に物々交換だったらしいからね。

アキュロスにしても、こっちの大陸の国々と比べると、現金の保有量は少ない。

「何はともあれ、新しい城塞都市の建設場所とその規模を、フラール女王を交えて話し合うのが先じゃな」

「そうですね。その内容によつては、格安で受けてもいいですし」

ガラハットさんの言葉に、僕は頷いて答えた。

報酬もアキュロスなら魔石払いで引き受けてもいいと思っっているしね。

「そうだな。フラール女王は、魔大陸じゃ珍しくまともな王だからな。仲良くするに越した事はない」

「僕達も拠点の土地を勝手に占有してるんですもんね。アキュロスは騎士団員も比較的多く利用していますし、ある程度の協力は必要だと思います」

ヒースさんも魔大陸の国の中では珍しく常識人のフラール女王とは、関係を良好に保っておきたい考えだ。

確かに、魔大陸の国の王様は皆んなクセが強いからな。フラール女王が一番常識人なのは間違いない。

それに報酬と言っても、何もお金だけが報酬ってわけじゃない。さつきも魔石でと思ったけど、その辺は色々考えられるんじゃないかな。

アキュロスに行くか。

魔大陸の拠点に顔を出す事はあったけど、アキュロスは久しぶりだな。

2 合同事業

魔大陸の聖域騎士団の拠点に、聖域の転移ゲートから飛んで、そこからアキュロスまでは低空を浮遊して進む乗り物——グライドバイクで移動だ。

僕は自前の近未来的なデザインングライドバイクに乗り、ガラハットさんとヒースさんは聖域騎士団が運用する軍用グライドバイクに乗る。

僕のはともかく、騎士団仕様のグライドバイクは軍用だけあり、頑丈に造つてあるので、なんならオークやオーガ程度なら轢き殺せる。

今回、フラール女王との会談には、僕とガラハットさんとヒースさんの三人で来ている。

危険な魔大陸にたった三人と思うかもしれないけれど、ガラハットさんやヒースさんは、常日頃

魔大陸のダンジョンに潜っているので、むしろ僕達三人でも過剰戦力だったりする。

地面の上を浮きながら走るグライドバイクは、道のない魔大陸も苦にせず疾走し、拠点からそれほど時間もかからず目的地にたどり着いた。

「俺もアキュロスは久しぶりだな」

「そうなんですね。僕もアキュロスには久しく来ていなかったですね」

ヒースさんと僕は、お互いグライドバイクを収納し、アキュロスの城壁の門へと歩きながら話す。聖域騎士団に支給しているマジックバッグ。

ヒースさんクラスが持つものは容量も大きいので、グライドバイクくらいは楽に収納できる。ちなみに、僕の場合アイテムボックスの魔法なので、収納量にほぼ制限はない。

「目と鼻の先だが、一応武装しておくか」

「もちろんじゃ。アキュロスが目の前とはいえ、ここは魔大陸じゃからな」

ヒースさんとガラハットさんが、それぞれアクセサリ型のマジックバッグから自身の武器を取り出し装備する。

僕の索敵範囲は広いので、不意打ちに遭う事はないけれど、魔大陸では何があるか分からない。常時武装する事を推奨される。

アキュロスの門で、フラール女王の側近であるリュカさんへの取り次ぎをお願いすると、待たさ

れる事少し、中へと通される。

この辺、魔大陸は緩いんだよな。

僕の顔が知られているつてのもあるとは思うけど、国の出入りつてもう少し嚴重でもいいんじゃないかな。

その分、魔物に対する備えはバッチリみたいなんだけだね。

僕達三人は、アキュロスの城へと案内された。

「イルマ殿、遠くからわざわざ申し訳ありません。フラール女王も直ぐに参りますので、少々お待ちください」

「リュカさんもお久しぶりです。了解しました」

案内された部屋に入ってきたリュカさんは、鬼人族の女性だ。

リュカさんに座るよう勧められ、しばらく待っているとフラール女王が入室してきた。

温暖な魔大陸とはいえ、相変わらず露出の多い衣装だ。

だが、フラール女王は魔族の中でもサキュバス族なので、種族の個性を指摘するのは間違いだ。目のやり場に困るけれど仕方ない。

まあ、魔大陸の人は気候の関係もあって、概ね布面積は小さめなんだけだね。

「イルマ殿もアキュロスをご覧になって分かったと思いますが、人が増えて現状ではそろそろ限界なのです」

「人が増える事自体は嬉しいのですが、この街はもう新しい住居を建てるスペースがありません。城壁を拡張するのも、今直ぐにはいきません」

挨拶を済ませると早速フラール女王とリュカさんが、それぞれアキュロスの現状を訴えた。確かに前に訪れた時に比べて人が多い印象を受けた。それにアキュロスは、城壁の内側いっぱいまでギチギチに建物が乱立している。

広いメインストリート以外は、細い路地も多く入り組んでいる。建物が石造りだからいいが、これが木造なら火事で街が丸ごと消失する事もあっただろう。

ただ、最初にフラール女王に言っておかないといけない。

「フラール女王。まず、僕達の拠点を拡張して、アキュロスから移住を受け入れるのは難しいです」

「あそこは聖域騎士団の拠点じゃからの。立ち入られては困る区画も多い。無駄なトラブルを引き起こさんためにも、外からの住民は受け入れられん」

「そうですか」

「そうですよね」

僕とガラハットさんから、僕達の拠点を拡張して住民を受け入れる案を却下されると、フラール女王はしょんぼりするが、リュカさんはそれはそうだろうと苦笑いした。

「だから無理だつて言っただじゃないですか。自分が楽をしたいからって、何でもかんでもイルマ殿が言う事を聞いてくれるなんてあり得ませんからね」

「むう。リュカが厳しい」

リュカさんがフラール女王に文句を言い始めた。

ああ、うん。フラール女王、自分で働きたくなかったのね。

まあ、魔法が得意なフラール女王だけど、土魔法が得意なわけじゃないそうさ。基本的に、魔大陸の王達はバトルジャンキー気味で、そこには常識人寄りのフラール女王も含まれる。

で、魔大陸で魔法と言えば、魔物を倒すための攻撃魔法になるわけで、好んで建築向けの魔法を使いたくないらしい。

実際、獣人族がメインの国は、城塞都市を築くのに、石を担いで積み上げたそう。

「だって仕方ないじゃない。先々代は土魔法が得意だったからいいけど、私は苦手なんだもの」

「鬼人族である私が魔法の事をとやかくは言えませんが、イルマ殿を頼るのも違うと思いますよ」
「いやリュカ殿。我ら聖域騎士団にも土魔法を使う魔法師団がいる。場合によっては、手助けする

のは構わない」

揉め始めるフラール女王とリュカさんをガラハットさんが止める。

何もかも僕達に丸投げじゃ困るけど、手伝う程度なら魔法の訓練にもなるし、僕達への報酬の問題も解決するんじゃないかな。

「街を囲う城壁を僕達が用意して、中の建物をアキュロスでつてどうですか？」

「浄化の魔導具もお願いできませんか。もちろん、必要数を購入します」

城壁を僕達が請け負うという提案をすると、リュカさんはコクコクと首を縦に振り、あわせて浄化の魔導具を注文してきた。

「リュカ、浄化の魔導具付きトイレもよ」

フラール女王が付け加えた。

浄化の魔導具付きトイレ、魔大陸でも人気なんだよね。

「タクミ。それよりまずは、アキュロスを拡張するのか、それともこの近くに新たな城塞都市を築くのか、それを決めないとダメなんじゃないか」

逸れかけた話をヒースさんが軌道修正した。

そうだね。まずはそれを決めないといけない。

「フラール女王、どうしますか？」

僕が尋ねると、二人は考える素振りを見せる。

「……そうね。リュカ、どうしよう」

「アキュロスを拡張してもいいのですが、今後の事を考えれば、新たな城塞都市を築く方がいいと思います」

リュカさんの意見には僕も賛成だな。

その方が、後々融通が利くと思うんだ。

「僕もアキュロスとは別にした方がいいと思います」

「そうじゃな。食料の入手方法もある」

「ですね。でもいきなり全てダンジョンからつていうのも難しいんじゃないか」

ガラハットさんとヒースさんも賛同した。

二人は食料調達に関して心配しているようだ。

確かに、ここ魔大陸では魔物の影響で、都市外での農業が不可能なので、城塞都市を築くとしても、まずはそこを一番に考えないといけない。

ちなみに、アキュロスを含めた都市国家は、城壁内に申し訳程度の農地があるのだけど、それだけじゃ到底賄えない。

そこで魔大陸に数多あるダンジョンの中でも特殊なダンジョンが役立つっている。

そのダンジョンでは、階層により農作物が収穫できる。

しかもダンジョンなので、一度収穫しても早ければ一日経てば復活する。肉類ももちろん、ダンジョンからの供給だ。

だから新たに城塞都市を築くとしても、その建設位置は重要になってくる。

「肉ダンジョンと穀物ダンジョン、そして鉱物ダンジョンが近ければ文句はないな」

「フラール様、直ぐに周辺の地図を持ってきます」

リュカさんが部屋を一旦退室した。

魔大陸に暮らすだけあり、フラール女王も城塞都市の建設場所選定のキーポイントが直ぐに分かったようだ。

地図を待つ間に、僕達が協力できる範囲を伝えておくか。

「フラール女王。僕達が協力できるのは、場所の選定を含む周辺の調査と、実際の建設については、土地の整地と城壁の建設。あとは魔導具の提供くらいでしょうか」

「整地と城壁を担ってくれるならありがたい。魔導具も無償ではまずかろう。魔石か魔物肉で支払う」

「それで十分です」

城塞都市の中は、フラール女王達に任せるのが一番いい。他の魔大陸にある都市国家と違い、ア

キュロスとは色んな種族が暮らしているからね。

住居の様式も僕達には分からない。

「お待たせしました」

少ししてリュカさんが丸めた大きな羊皮紙を持って戻ってきた。

そのまま大きなテーブルに広げる。

「騎士団の地図でも確認しよう」

ヒースさんが、聖域騎士団で調べたダンジョンの位置を記した地図を取り出した。

聖域騎士団でも、訓練を兼ねて周辺の調査は定期的に行っているからね。

お互いの地図を見比べ、ダンジョンの位置と種類を確認していく。

「……肉が獲れるダンジョンは多いんですけどね」

「穀物ダンジョンは希少じゃぞ」

「ああ、穀物ダンジョンを基準にした方がいいと思うぞ」

ガラハットさんとヒースさんが言った。

肉が獲れるダンジョンは多く、牛系の魔物や馬系の魔物、鳥系の魔物、蛇やドラゴンも魔大陸では好んで食される。

ちなみに、ドラゴンは美味い^{おい}個体が多い。

それに人型でもオークのように、魔大陸の人達が好んで積極的に狩る魔物も多くのダンジョンで出没する。

それとは別に、植物系の魔物から食べ物を獲れる事もあるが、穀物は多くの場合ダンジョンの魔物からではなく、穀物ダンジョンと呼ばれる場所で収穫できる。

そんな穀物ダンジョンの数は少なく希少なんだ。

とはいえ魔大陸の人達は、基本的に肉食が中心の種族が多い。僕はそれほど穀物ダンジョンにこだわらなくてもいいんじゃないかと思っている。

「アキュロスの近隣では、ここが穀物ダンジョンですね」

「二ヶ所となると、このアキュロス寄りのダンジョンを基準に位置を決めたいわね」

「できるだけアキュロスに近い方がいいですね」

フラール女王とリュカさんが頷いて言った。

住民の移動や工事の事を考えると、新たに築く城塞都市はアキュロスから近く、アキュロスの一部と分かる範囲が望ましい。

他の国から攻められる事はないだろうけど、新しい城塞都市がアキュロスの一部だと主張する必要はある。

可能ならば、アキュロスから目と鼻の先くらいの距離にしておきたいだろう。

「いつその事、グズルとガンドルフに声をかけてもいいかもね。もちろん、主導権はアキュロスが握るのは譲れないけど」

「珍しく良い案ですね」

「リュカ、あなた失礼よ。私、一応女王よ」

フラール女王の提案に、リュカさんも賛成のようだ。

ここアキュロスほどではないけれど、魔大陸にある他の国も、人口は増加傾向らしいからね。そして名前が出たグズル王とガンドルフ王。

グズル王は、バーガードを治める熊人族の獣王。並外れた巨体の寡黙^{かも}な王。

もう一人のガンドルフ王は、ロドスを治める悪魔族の王。悪魔王と呼ばれている。

なぜ、フラール女王がこの二人の名前を出したかというと、距離的な問題もあるが、比較的まとまな王となると、この二人しかないからだ。

シュミハザールを治める鬼人族の鬼王ジャイル王も、脳筋ではあるがまだまとまな人。だけど、シュミハザールは位置的に遠いからね。

で、残るレープスタンを治める白虎の獣人族であるディーガ王や、アトロポリスを治める獅子の獣人族であるライバー王は、基本的に普通に話すだけで疲れる。

王同士が顔を合わせれば、直ぐに喧嘩になる。

比較的巧みな治世のグズル王とガンドルフ王の国は、このところアキュロスとの交易も盛んになっていて、それもあるアキュロスほどではないが、同じような問題を抱えている。

「まあ、ガンドルフ王とグズル王の事は後回しで構わない。まずは、城塞都市を築く場所を決めましょう」

「話を逸らしたのは女王ですよ」

「リュカ、うるさい！」

僕はそのやり取りに苦笑いしながら頷く。

「そうですね。バーガードとロドスが参加するにしても、外壁で囲ってからですしね」
まずは、建設場所の選定をしないと。

3 現地調査からの

僕達は地図を頼りに魔大陸を南下していた。

フラール女王やリュカさんが一緒なので、グライドバイクでの移動はなしだ。

欲しいと言われても断るのが大変だからね。

それにアキュロスから徒歩で移動できる距離じゃないとダメだ。

「この南に穀物ダンジョンですね」

「ダンジョンのランクは？」

「難易度は中程度。浅い階層なら戦士でない者でも採取が可能ですね」

リュカさんが、地図を片手にフラール女王に説明する。

アキュロスからそれほど離れていないので、このあたりならアキュロスとの行き来も、そんなに危険じゃないだろう。

「近くに高難度のダンジョンは？」

「たまたまですが、この近辺には高難度の上級ダンジョンはありません。初級のダンジョンがいくつかと、中難度のダンジョンが三つですね」

「なら万が一スタンピードが起こっても大丈夫そうですね」

堅固な城壁で囲うとはいえ、都市の近くにある高難度の上級ダンジョンから魔物が溢れては大変だ。

一応、城壁は下位のドラゴンが攻撃しても大丈夫なように強化するつもりだけど、わざわざリスクの高い場所に建設する意味はない。

たとえば高難度ダンジョンがスタンピードを起こしても、距離があればアキュロスからの援軍が間に合う。

それに肉を目的にするなら、そこまで上級のダンジョンじゃなくてもいいからね。

まあ、なぜかランクの高い魔物の方が美味しい傾向にあるけれど、中級のダンジョンで出沒する魔物でも十分美味しい。

「ただ、地盤的にはもう少し西側の方がいいですね」

「そうですね。このあたりは湿地ですから」

「そうそう。地下水脈も確認しておかなきゃダメですね」

「はい。都市の水を丸ごと魔導具でというのは贅沢ぜいたくすぎます」
僕とリユカさんは必要事項の確認を進める。

地盤は最悪僕が整地する時に無理やり整える事も可能だけど、わざわざ軟弱なんじやくな湿地を選ぶ必要はない。

「一度、もう少し南側を見てみましょう」

「了解です」

現地調査は、僕とリユカさんが主体で行っている。ガラハットさんとヒースさんは、周辺の警戒と魔物が出沒した場合の排除だ。

フラール女王？ 周辺のダンジョンを確認してくるって言って行っちゃった。

リユカさんも高難度のダンジョンじゃなければ、フラール女王に護衛なんて要らないって、注意もしない。

一国の女王が一人でダンジョンに潜る。それを咎めとがずスルーする側近。これが魔大陸クオリティーだよな。

「そういえば、城塞都市の大きさはどうします？」

「グズル王やガンドルフ王には、報告しちを送ったばかりで返事は少しかかるでしょうし、城壁内の農地を広めに造りたいので、余裕を持たせたいと思っているのですが」

建設場所もそうだけど、築く城塞都市の大きさも決めなきゃいけない。

ウェッジフォートやバロールよりも大きな城塞都市なら、アキュロスを拡張するのと大差ない労力になってしまう。

湿地は問題外。

可能なら少し高めの土地で、なおかつ地下に豊富な水脈、もしくは近くに流量の多い川が欲しい。贅沢を言わせてもらおうと、井戸を掘った時、かなり深くまで掘らないと水が出ない場所は避けたい。

ポンプの能力に関係してくるからね。

ダンジョンの位置を確認しながら、城塞都市を建設可能な場所を探す。そしていくつかの候補地を見つけ、一旦アキュロスに戻る事にしたのだけど、フラール女王が戻ってこない。

するとリュカさんが、やれやれといったジェスチャーをする。

「はあ。仕方ないですね。私が迎えに行ってくださいますので、イルマ殿達はアキュロスに戻っていただいて大丈夫です」

「えっと、探すのを手伝いましょうか？」

「いえ、どうせ直ぐに見つかるので」

フラール女王がふらふらと出歩くのはいつもの事なのか、リュカさんは一人で大丈夫だと言い、迷う事なく一つのダンジョンへと向かった。

何だろう。

フラール女王センサーでも搭載してそうな迷いのなさだな。

それから二時間ほど経ってリュカさんがフラール女王を連れて帰ってきた。

ただ、グズル王やガンドルフ王と連絡がまだついていないので、次の話し合いは十日後と決め、僕達は聖域へと帰還した。

僕も聖域を何日も留守にしたいからな。

そして十日後、再びアキュロスを訪れ、城の会議室に案内されると、そこには熊獣人の巨漢グズル王と、悪魔王ガンドルフ王が側近と共に待っていた。

「……イルマ殿、今日はよろしく頼む」

「久しぶりだな、イルマ殿」

「グズル王、ガンドルフ王もお久しぶりです」

僕がグズル王とガンドルフ王に挨拶していると、フラール女王が言う。

「挨拶はいいから座っちゃって」

「フラール様！」

そしてリュカさんに叱られていた。

うん。いつも通りだな。

「フラールから話は聞いた。この近くに新たな城塞都市を築くそうだな。我がロドスも住居問題があつてな。渡りに舟だったのだ」

「……我がバーガードも少々手狭てげまになってきている」

やっぱりロドスやバーガードもアキュロスほどではないけれど、人口過密状態になりつつあるぞ

うだ。

グズル王とガンドルフ王は、城壁をもう一回り拡張する事を迫られていたのだが、流石に大工事過ぎる。

ゆくゆくは、今の城壁の外側に城壁を拡張するつもりではあるが、それまでの時間稼ぎになるなら一枚噛みたいとの事だった。

フラール女王が言う。

「幸い、アキュロスは雑多な種族が暮らす国だからね。魔族や獣人族、人族など多様な移民が入ってきて問題ない」

いづれロドスやバーガードの拡張は行こうさだけど、それには流石に時間がかかる。

それまでの時間稼ぎと言える二人の王は、ちゃんと先の事を考えて国家を運営しているんだなと、感心してしまった。

「じゃあ、アキュロス周辺のダンジョンの位置と、それを踏まえての城塞都市の建設予定地を説明するわね」

フラール女王がそう言ってリュカさんに視線を送る。

「では私から。まず、アキュロスは魔大陸で唯一外に開かれた港を持つ国です。ですので、ロドスやバーガード以上に国の拡張問題は深刻です。そこで以前より交流のあったイルマ殿方に協力を願

い、色々と話し合った結果、新たな城塞都市を築くという事が決まりました。この地図をご覧ください
さい」

リュカさんがアキュロス周辺の地図を広げる。

「お二方も分かっているでしょうが、城塞都市を維持するにはダンジョンは切り離せません」

「主食となる肉、穀物、鉱物、薬草や毛皮、布まで、ダンジョンなしには語れぬからな」

「……どこにどのようなダンジョンがあるかは重要だ」

グズル王とガンドルフ王が相づちを打つ。

リュカさんの説明も前置きみたいなものだから、サクサクと進む。

「はい。それを考慮して選んだ候補地に印をつけてあります」

二人の王が地図を凝視する。

「水の手は？」

「問題ありません。近くに川のない候補地の地下には、豊富な地下水脈を確認しています」

「深さは？ 井戸が深いと女子供が苦勞する」

「その点も問題ありません。井戸はそれほど深く掘る必要はないです。それにイルマ殿からポンプなる道具を提供していただく予定ですので、お年寄りでも水を汲むのに苦勞はないでしょう」

ガンドルフ王が一番に質問したのは、水の確保だった。

人が生きていく上で水はなくてはならないものだ。豊富な水があるという事は、人の暮らす場所を考えた時、一番優先すべき事だと思う。

水脈の深さも気になったようだけど、その辺も抜かりない。比較的浅い位置でも湧く場所を選定してあるし、しかも水質も検査済みで問題なしだ。

「……上級ダンジョンが近くはないのはいいい」

「はい。魔物が溢れたくらいで崩れる城壁を築くつもりはありませんが、民が安全に暮らせるという事が重要ですから」

グズル王はダンジョンの種類と位置を見て、高難度の上級ダンジョンが近隣にない事を評価した。戦う事が好きで、常日頃自らダンジョンに潜る魔大陸の王とはいえ、国民の安全を一番に考慮するあたり、二人の王は、ただのバトルジャンキーじゃない。

「それでどこが最有力なのだ？」

「ここですね。深い井戸を掘る必要がなく、しかも近くに湧水量が豊富な泉があり、そこから流れる川もあります。水路を引き込めば、農地を造る上で役立ちますから」

リュカさんが僕達の一推しの建設予定地を指差し、その理由を説明する。

近くに湧水量が豊富な泉があるのは大きい。

井戸の水だけで農業は厳しいからね。穀物をほぼダンジョンから確保するとしても、食料を入手

する手段は複数あった方がいい。

それに湧水だから水質が良い。生活用水にも十分使える。

魔大陸では、雨水を溜めて利用するシステムもあるのだけど、いつ降るか分からない雨頼みよりも、潤沢に使える水があるというのは大きなアピールポイントだ。

「肉を獲れるダンジョンの数は問題ないだろう。穀物ダンジョンはここか。ここを基準に候補地を選定した結果がこれというわけか」

「……塩や鉱物を産出するダンジョンは一つあれば十分だろう。よく調査されている」

「ありがとうございます。それで気になる事は？」

好感触だけど、少しだけ含みがあるように聞こえた。それはリュカさんも同じだったみたいで、二人の王に問いかける。

「ここ。それほど近くもないが、遠く離れているとは言い難い場所に、この厄介なダンジョンがある」

「……我らの苦手とするダンジョンだな。ガンドルフやフラーなら問題ないのかもしれないが、獣人族の我らは近づきたくないな」

ガンドルフ王とグズル王が指摘したのは、ある一つのダンジョン。ガンドルフ王をして厄介と言わしめ、グズル王が苦手で近づきたくないと言ったそのダンジョンは、いわゆるアンデッドダン

ジョンというやつだ。

魔物を倒しても獲れるものが少ない上に、物理攻撃が効きづらい幽体系の魔物も出没する。実体のあるスケルトンやゾンビ系に關しても、鼻の良い獣人族には苦痛でしかないだろう。グズル王が苦手と言いつけるのも分かる。

「そのアンデッドダンジョンは潰す予定よ」

フラール女王がそう言うと、グズル王とガンドルフ王がそれぞれ口を開く。

「……俺はパスだ。獸人にゾンビの匂いは耐えられん」

「俺は参加してもいいが、俺も魔法よりは直接殴る方が好きだからな。できれば遠慮したい」

グズル王は、早々に不参加を表明。

ガンドルフ王もあまり気乗りはしない感じだな。

「大丈夫よ。イルマ殿がいれば簡単でしょう」

「へっ!? 僕?」

「イルマ殿。得意でしょう?」

「ま、まあ、問題ないと言えば、ないですけどね」

フラール女王からいきなり役割を振られた。

確かに僕は、アンデッド系に対しては、圧倒的な強みがある。それこそ広域浄化魔法でゴリ押し

すれば、ダンジョンコアまでそんなに時間もかからないだろう。

「というわけだから」

「なら心配いらないだろう」

「……俺も問題ない」

僕の場合は考慮される事なく、アンデッドダンジョンのコア潰しを押しつけられる事が決定したみたい。

「まあ、アンデッドダンジョンの方はそんなに急ぐわけじゃないし。まずはグズルとガンドルフのところから何人移すか分かってる?」

「そうだな。家族持ちに限定して、百人なら大丈夫か?」

「……俺のところも家族持ち限定で、ガンドルフのところと同じく百人でどうだ」

「その程度なら問題ないと思うわ。どうせロドスやバーガードの拡張もぼちぼち進めるんでしよう。工事はこちらに任せてもらって大丈夫よ」

ロドスとバーガードから百人ずつ移住する事が決まった。

家族持ちが条件なのは理解できる。

お年寄りや小さな子供を含む家族連れよりも、若くて働ける人員を国に残したいんだろう。

フラール女王も受け入れた。アキユロスは商売も盛んだから、戦えない者にも働きどころはある

からね。

で、フール女王は城塞都市の建設を自分達でするつもりらしい。

ロドスやバーガードは、これから少しずつ拡張工事をする予定で、それに人が取られるからという気遣いなのかな。

「いや、鉱物ダンジョンで石材の切り出しと搬出^{はしり}は手伝おう」

「……俺のところも力仕事なら問題ない。同じく石材の切り出しと搬出を手伝う」

「あら、そう。ならお願いするわ」

おおまかな役割分担が決まったみたいだ。

とりあえず一旦聖域に帰るか。

城壁の建設、マリアやレーヴァが手伝ってくれないかな。

騎士団から人を出してもいいな。

4 報告と工事開始

色々と方針が決まったので、僕達は一旦聖域へと戻った。

家に帰ると、ドアの音を聞きつけた子供達が駆けつけてくる。

「パパァー！」

「パパァー！」

「パパ！ おかえりなさい！」

「ただいま！」

フローラが真っ先に駆けつけピョンと僕にしがみつき、次に春香、最後にエトワールが抱きついて迎えてくれる。

「パパ、パパ。今日ねえ。今日ねえ！ 駆けっこで一番になったよ！」

「春香は今日ね。家族の絵を描いたの！」

「エトワール、今日は魔法の練習したの」

「そうなんだね」

子供達が、それぞれ好き勝手に今日の出来事を話してくれるけど、僕は聖徳太子^{しやうとくたいし}じゃないんだから、一度に話されると混乱しちゃうよ。

三人の子供達を、コアラのようにくっつけたまま、リビングへと向かう。

「タクミ様、おかえりなさいませ」

「タクミ様、おかえりなさい」

「おかえりなさいませ」

「ただいま」

ソフィア、マリア、マーニに迎えられ、子供達三人を抱えたままソファアに座る。

「で、どこまで進みました？」

ソフィアが話し合いの進捗しんしゆくを聞いてきたので、おおまかに説明しておく。ソフィアも聖域騎士団の一員だからね。

「グズル王とガンドルフ王も含めて話し合って、城塞都市の建設場所はほぼ決定したかな」

「それはよかったですね。聖域騎士団も建設に参加するのですか？」

「いや、訓練がてら周辺のダンジョンを調査すればいいんじゃないかな。可能な限りアキュロス側で建設してもらう事になったよ」

ちようど、リビングにアカネもいたので、例の件を話しておこうと声をかける。

「そうそう。建設予定地の近くに、アンデッド系の魔物が出没するダンジョンがあるんだけど、そのダンジョンを潰す予定なんだよ。アカネも手伝ってくれるかな？」

「アンデッド系のダンジョンなんて嫌よ。レイスやリッチ、スケルトンならまだ我慢できるけど、ゾンビなんて絶対イヤ」

「ゾンビはクツチャイニャ。猫人ねじんぞく族のルルも断固拒否ニャ」

「本当よねえ。私達レディーを、オカルト系の討伐に誘うなんて、デリカシーがなさ過ぎよ」

「そうニャ」

「ご、ごめんよ」

アカネにけんもほろろに断られてしまった。

彼女なら手伝ってくれるかなって思っていたけれど、ここまでアンデッド系の魔物が出没するダンジョンは不人気なんだね。

そしてよく考えれば、アカネの従者であるルルちゃんも猫人族。鼻の良い獣人族にゾンビはNGだった。

アカネは光属性魔法が得意だから、手伝ってくれるなら、僕的には助かったんだけどな。

もうアンデッドダンジョンは、僕が攻略するって覚悟を決めた方がいいな。

僕の二振りの愛剣である聖剣せいけんヴァジュラと聖剣フドウ。

聖剣と名付けられるだけあり、どちらもアンデッドには絶対的な強さを發揮する。

ヴァジュラは魔力を多く込める事により浄化の雷光を発し、聖剣フドウは魔力を多く込める事によって、浄化の炎を発生させる。

浄化の魔法に加え、この二本の聖剣があれば、僕一人でもアンデッドダンジョンを潰すのは、そんなに難しい仕事じゃないと思う。中級のダンジョンだと言ってたしね。

最悪、僕と従魔だけで行こうと考えていると、アカネが今回のフラール女王からの案件について聞いてきた。

「それよりタクミ、どこまで関わるの？」

「土地の整地と城壁の建設かな。場合によっては水路と井戸もか。ポンプと浄化の魔導具は、格安で売って事で話をしているよ」

「まあ、そのあたりよね。アキュロスはオケアノスも交易で行き来している場所だし、ある程度便宜をはかるのは仕方ないわ」

アカネの言う通り、聖域騎士団の拠点ではガルダーが離着陸するし、何より拠点の敷地は念入りに浄化している。

アキュロスを含めた周辺の魔物の分布に変化があっても不思議じゃない。それ以外の国にはまず影響はないだろうけど、距離的に一番近いアキュロスのあたりに、魔物が流れているかもしれないのだ。

そういう事情もあってアキュロスが困っているなら、できる範囲で力を貸すのはやぶさかでないんだよね。

三日ほど子供達とたっぷり遊び、聖域での仕事を纏めて片付けた僕は、一人魔大陸の城塞都市建

設予定地へと転移した。

そう。今回は一人。護衛には従魔であるカエデがついてくれる。

魔大陸の魔物相手とはいえ、厄災クラスの魔物——アラクネであるカエデなら何の問題もない。なんならツバキやタイタンも自由にさせれば、ドラゴンが束になって襲ってきても大丈夫だ。

「マスター！ ツバキ出してえー！」

「はいはい」

魔大陸に着くなりカエデにお願いされ、亜空間からツバキを呼び出す。

「ブルルッ！」

ヌツとツバキの巨体が現れる。

普通の軍馬よりも大きいとされるバトルホースなどと比べても、グレートドラゴンホースであるツバキは大きい。身体は竜鱗に覆われ、突き出す角は凶悪で、長い鬣が揺れる様は、僕から見ても威圧感がハンパない。

「合体！」

そんなツバキに、カエデがいつものように乗る。蜘蛛の下半身でしっかりとホールドするので、カエデがツバキから落ちる心配は皆無だ。

「じゃあマスター！ パトロール行ってくるねえー！」

『行つてまいります』

「うん。あまり遠くに行かないようにね。つて、もういないし」

相変わらずカエデとツバキは仲良しだな。

僕は周囲を見渡す。すでに、地面には円形に縄張りなわばが描かれている。ウェッジフォートよりも二回りくらい小さいだろうか。それでも城塞都市としては立派な部類だ。皆とてまでいかないレベルになりそう。

不思議なんだけど、魔大陸の都市国家六ヶ国、全て円形なんだよね。綺麗な丸きれいなまるの国もあれば、少し楕円形だえんけいの国もあるけれど、どこも円形ではある。

で、フラール女王に縄張りをお任せしたら、やっぱり円形だった。そんなどうでもいい事を考えていると、フラール女王とリュカさんが、多分魔法使いの兵士だろう人達を引き連れて現れた。

「お待たせしましたか？」

「いえ、さつき来たところよ」

「イルマ殿、今日はよろしくお願いします」

フラール女王とリュカさんと簡単に挨拶を交わし、今日の予定を話す。

「とりあえず、まずは縄張り内の整地から始めます」

「では、私達は整地が終わり次第、城壁内の縄張りに移ります」

今回、僕は城壁内の建物に手をつけない。それに関しては、アキュロスの人達にお任せだ。

早速とばかりに、僕は縄張りされた範囲を目視しながら、広範囲に土魔法を発動。地面を平らに、なおかつある程度固めていく。

ここでポイントなのは、ある程度固めるといふ匙加減さしかげん。僕が地面をガチガチに固めてしまうと、その後建物を建てるのが大変だからね。

魔法を使わないで工事するとなると、地面に一つ穴を掘るだけで大変なんだ。

しかも今回、農地にする区画もあるから、僕が整地で固め過ぎてはいけない。

ウェッジフォートを造った時と比べ、はるかに成長した僕だけど、いつ魔物が出没するか分からない魔大陸で、魔力を枯渇こかつさせるわけにはいかない。

とはいえ、カエデとツバキが周辺の魔物を狩りまくっているだろうから、不意に魔物が襲ってくるなんて事はないだろうけどね。

ズズズズズ……

「『オオオオオオ!!』」

僕が地面を平らにすると、ギャラリーと化していたアキュロスの兵士達が声を上げた。

多分、こんなに広範囲に土魔法を使ったから驚いたんだと思う。

彼らも工事に土魔法を使わないわけではないだろうけど、僕のような規模ではないんだろうね。

「ごっそりと減った魔力をマナポーションを飲んで回復させ、次に決めた範囲の整地をする。整地を繰り返して、円形に縄張りされていた範囲を終え、マナポーションでお腹がタプタプになった苦しさを我慢していると、ドドドドッと地響きが聞こえてきた。」

「マスター！ たいまいー！」

『ただいま戻りました』

「あ、ああ、うん。楽しかったみたいだね」

戻ってきたのはカエデとツバキ。カエデの満面の笑みを見れば、今日は満足するまで暴れられたみたいだね。ツバキも自由に広い場所を駆け回って満足したようだ。

「今日は帰ろうか」

「OK！」

亜空間を開くとカエデはツバキに騎乗したまま入っていく。

アキユロスの人達は、鉱物ダンジョンから切り出した石材の運び込みを始めていた。

僕はフラール女王とリュカさんに一声かけ、聖域へと帰るため、一旦魔大陸の拠点に向かう。フラール女王達の目がなければ、このまま転移して帰れるんだけどなあ。

二日目、僕が拠点方面に一度転移してからツバキに乗り、城塞都市建設予定地へ行くと、今日は

ロドスとバーガードの兵士達も、ダンジョンからの石材搬出作業をしていた。

「じゃあ、行ってくるねー！」

「気をつけてね」

亜空間から飛び出したカエデが、ツバキにライドオン。いつものように「合体！」と叫び、そのまま駆け去っていった。楽しそうで何よりだ。

さて、僕は今日からひたすら城壁造りだ。

ズゴゴゴゴオオオ!! 高さは二十メートル。分厚く頑丈な石の壁が立ち上がる。

その場の地面を使うので、自然と外側に堀ができるんだけど、その堀も滑らかな石に変え、なおかつ強化しておく。

「ふう。先は長そうだな」

縄張りのラインに合わせて城壁を生成していく作業を延々と繰り返す。もちろん、合間合間にマナポーションを飲んで、魔力を回復させながらだ。

規模は小さいので、ウェッジフォートの時よりハイペースで造ろうと思えば可能だけど、ここは魔大陸。スタンピードを想定して城壁を造らないといけない。しかも未開地より強い魔物ばかり。補修の事も考慮しつつ、ドラゴンの体当たりに負けない城壁を目指す。

「このペースなら三日ちよいか」

今回、城壁内の建物には手を出さないで、ただ同じ作業を続けるのみだ。

アキュロスの住居は、僕達の住む家とは規格が少し違う。

獸人族でも巨漢の種族や、魔族でもガンドルフ王のように人族よりも大きい人向けに、天井の高さやドアの大きさが違う。ただ、人族もないわけではないので、個々の希望に沿って住居は建てられるそうだ。取り纏める人は大変だろうね。

僕としては城壁を早く完成させ、水路と井戸を掘った後、アンデッドダンジョンに行きたいんだけどな。アンデッドダンジョン。僕は儲けがどうか考えないけれど、臭いのは嫌なんだよ。嫌な事は、早めに終わらせたい。

僕が黙々と城壁を生成していると、フラール女王とリュカさんが近づいてきた。

「お二人共、どうしました？」

「門の位置を相談しようと思ひまして」

「あと開閉する門の扉もお願ひできるかしら」

リュカさんとフラール女王が言った。

門の位置と門にはめる扉か。

「鉄か魔鉄でいいなら、城壁が完成した後に造りますけど」

門の位置に関しては、アキュロスのある方角に一つ。その対角線上の反対側に一つ。そしてその

左右に一つずつの計四ヶ所に設置する事に決まった。

堀があるので、跳ね上げ式の橋をと提案してみたんだけど、面倒だから要らないと言われてしまった。だから仕方ないので、門を設置する場所に橋を架ける。面倒って……

「鍊成！」

積まれたインゴットが一瞬で巨大な門に鍊成される。

結局、城壁をぐるりと囲うのに四日かかった。

ここより規模の大きいウェッジフォートと比べても日数がかかってしまったけれど、ここは魔大陸、無駄に頑丈にしたから仕方ないよね。で、現在は、鍊金術で門の鍊成を行っているところだ。

あと水路や井戸も残っているけれど、これでひとまず僕の仕事はほぼ終わりかな。

まあ、アンデッドダンジョンの攻略が残っているけどね。

5 下準備

アキュロスの副都市と言える城塞都市の城壁は完成した。残すはアンデッドダンジョンの攻略だ

立ち読みサンプル
はここまで

けど、その前にひと休みだ。

リビングでお茶を飲み寛ぐ。魔大陸でみっちり魔力を使っただけから休息は必要だ。まあ、魔力はひと眠りすれば全快なんだからね。

「念のため聞くけど、心変わりしてアンデッドダンジョンに行きたくなった人、いる？」

ダメ元でリビングにいる皆んなに聞いてみるも、分かっていた事だけど、手を挙げるところか誰からも反応がない。僕と目すら合わせない。うん、分かってたよ。

「タクミ様、流石にアンデッドダンジョンに行きたい女性はいないかと」

「そうですよ。私もタクミ様のお役に立つのならお供したいですけど、アンデッドダンジョンは遠慮したいです」

「タクミ様、申し訳ありません。ご一緒したいのはやまやまですが、獣人族は鼻が利くので……」

ソフィア、マリア、マーニの三人に謝られた。

「いいじゃない。タクミなら死霊系のダンジョンなんてイージーでしょう。ちゃっちゃと行って潰してくればいいのよ」

「タイタンがいるニャ」

「そうよ。タイタンなら匂いも、アンデッドの見た目の怖さも関係ないわよ」

「まあ、そうなんだけどね」

